



ほら、よく見て。こうするんだよ！

よいことになっています。競技と測定は主催者が定める共通のルールに従って、各小学校の体育館で、矢型の折り紙飛行機を一人一機（A4判コピー用紙）作って飛ばす方法で行われます。各校のおやじたちは飛行距離を測定し、その結果を主催者に連絡します。主催者は全記録を集計し、個人ベスト・テンと小学校ベスト・スリーを決め、公表する（保護者の同意がない場合の個人氏名はイニシャルまたは匿名）とともに、表彰状と記念品を該当校に届けます。表彰式については校長の判断に委ねています。



願いをのせて、エイ！

平成一七年度の第一回大会は小学校四四校中の一二校、児童四三三人、第二回大会は一五校、児童四四七人（他に家族二六三人）が参加して実施されました。子どもたちには好評で、「学校のチャンピオンだ」から「どうすれば杉並で一番になれるかなあ」へと工夫の芽や夢の膨らみが見られるとのこと。手軽な遊び、科学の眼、工夫、向上心を地域の

### 事業の推移とおやじの悩み

### おやじ日本の活動方針と重点的な取組

「おやじ日本」は、子どもと地域に向かい合おうとする父親を応援する、子どもや地域のことについて父親が学ぶ機会を提供する等の

### 事業のねらいと経緯

「おやじネットワーク杉並」は子どもたちの

# 「おやじの会」合同の居場所づくりの挑戦と悩み

杉並紙ヒコーキ王決定戦

おやじ日本

事例紹介

6

活動方針を掲げて活動している団体です。現在、各地の「おやじの会」（母親等の女性も参加することから会の名称はさまざまです）活動との連携を深めつつ、登下校時の子どもを地域で見守る「83（ハチさん）運動」「安全もケータイさせよう」をキャッチフレーズとする「おやじ日本発インターネット・サーフティ運動」に重点的に取り組んでいます。加えて国の「放課後子どもプラン推進事業」を積極的に推進する立場から調査研究を受託し、昨年九月以降、個人を対象とした意識調査と団体を対象とした活動事例調査を実施しています。この調査では、特に地域住民の子育てへの保護者（特に父親）の参画を図る上での諸課題の把握と、課題の解決のためにとった手法など特徴ある取組事例を収集し、分析することとしています。

ここでは、寄せられた事例のうち、放課後子どもプランとして補助を受け実施しているものではありませんが、東京都の「おやじネットワーク杉並」が取り組んでいる「杉並紙ヒコーキ王決定戦」事業をとりあげて、子どもの居場所づくりにかかる課題並びに解決のてがかりを紹介します。

### 準備から表彰までの実施概要

健全育成活動に関する情報や意見、ノウハウ等を交換しあう緩やかな交流会として、区立学校を活動拠点とする「おやじの会」のメンバーを中心に平成一七年二月に立ち上げられました。これを機に、個々の会を越えた共通の「仕掛け」による交流が話題となり、その結果考案されたのが小学校での「杉並紙ヒコーキ王決定戦」です。

手軽な遊びをとおして、おやじたちがそれぞれの活動拠点で子どもたちと楽しみながら地域活動の手がかりや具体的な手法を学習しつつおやじたち相互の親睦を深める、おやじたちと学校やPTA・地域団体との連携を促進する、「おやじの会」の立ち上げに迷い悩んでいるおやじたちにきっかけを提供するねらいと願いが込められた仕掛けです。

競技会の準備は「おやじネットワーク杉並」を主催者として、一〇月から一二月にかけて実施の告知と呼びかけ、校長への協力依頼、参加申込みの受付、参加校の校長・PTAとの話し合いといった手順をふんで進められます。参加校では「おやじの会」やおやじたちが児童の参加申込みの受付を行い、競技会を開催します。競技会は各学校の行事などの状況を見ながらおおむね一月中旬に実施すれば

触れ合いが支えるユニークなイベントですが、今年度は一二校にとどまったとのこと。インフルエンザや他団体の体育館利用等に影響された面もあるようですが、主催者の役員はこのイベントの難しさについて「区内のおやじの会の動きがわからない。情報を得るルートやノウハウが乏しい。仕事の都合もあるし、各おやじの会には独自の方針や行事があるって、調整が難しい。学校関係者にも温度差がある」と語ります。

この悩みは「おやじ日本」の受託調査の結果と符合しています。「子どもたちの育成活動に参加している」と回答した人をとっても、仕事の日程調整が難しい、校長等学校関係者との連携強化、企画・調整・周知等の負担、他団体との情報交換などでの課題が指摘されているのです。杉並区のおやじたちの悩みは全国共通と見てよいでしょう。

意欲的に地域の活動に取り組んでいるおやじたちは、企業経営、学校、教育行政、地域団体等の関係者に子どもたちの健全育成を共通のテーマとして「伴走」してくれることを求めています。杉並区の事例は、多くの関係者がそれぞれの独自性を尊重しつつ連携して放課後における子どもたちの居場所づくりにかかわることの大切さと実践へのヒントを提示しているように思います。

（副会長「放課後子どもプラン」担当） 納富善朗